



本棚『ゴジラとヤマトとぼくらの民主主義』佐藤健志著(文藝春秋 一九九二年)

角松, 生史

(Citation)

東京 : the monthly magazine Tokio, 11(122):14-15

(Issue Date)

1993-02

(Resource Type)

article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90003994>



【正誤表】

14 ページ上段

誤：「表層批判」

正：「表層批評」

『ゴジラ』

『ゴジラ』

佐藤健志著（文藝春秋 一九九二年）

角松生史（東京大学社会科学研究所助手・行政法）

本棚

公称三六万部のベストセラーとなった『ウルトラマン研究序説』（中経出版）に刺激されてか、昨年は『怪獣学入門』（JICC出版局）、『ゴジラの論理』（中経出版）、『ウルトラマン昇天』（朝日新聞社）などの出版が目についたが、本書は、『ゴジラ』『宇宙戦艦ヤマト』など人口に膾炙した諸作品の物語を分析し、そこに反映されている「それぞれの時代において支配的だった社会的イデオロギー」を探り当てることをめざしたものである。「表層批判」全盛の現在では懐かしさすら感じさせるこの方法の結果浮かび上がってくるのは、「戦後民主主義の破綻」だと著者は言う。そう、本書は「戦後政治の総決算」から近時の改憲論へと続く「戦後見直し」論の系譜に連なるものなのである。

個々の作品に即した分析は、さほどユニークではないが、耳を傾ける価値はある。例えば『ゴジラ』論。アメリカの水爆実験によって誕生したゴジラが何の関係もない日本を荒し回るといふ初期ゴジラの基本構造は、巻き

込まれ戦争を恐れる日本人の被害者意識』が「ひがみ」に他ならない。他方、キングコング・モスラなどの善玉怪獣が登場しやがてゴジラも善玉に転向する中期は、『ウルトラ』にも共通する「安保ただ乗り」、「甘え」の発想だといふのだ。また、高畑勲を「日本版ナロードニキ」と決め付け糾弾するあたりのアジビラの威勢の良さは痛快ですらある。

しかし著者は、個別の批判を全て「戦後民主主義」に結びつけ、その「一貫した物語」を語るといふ「大技」を試みる。「ヤマト」の製作者西崎義展の右翼的主張から、「民主勢力」が持ち上げる高畑勲・宮崎駿の作品（『おもひでばろぼろ』『風の谷のナウシカ』）を経て、安彦良和『アリオン』の「新左翼的革命理論」に至るまで、全て「戦後民主主義」の産物だといふのだ。意欲は買うが、いかにも無理である。右の諸作品の共通性を探るとすれば、それは、著者の思想の「敵」であるといふただ一点であろう。「戦後民主主義」とは、実は、著者のそれと相反するさまざまなイデオロギー

に貼られた共通のレッテルに他ならず、本書に言う「一貫した物語」とは、著者自身のイデオロギーの陰面に過ぎない。要するに、反対者を「左右の反共主義」と一からげに括ってしまうあの論法と同じである。

他人を批判するだけあって著者自身の立場は概ね一貫しているが、混乱もある。「社会公認の強制力」としての国民国家の権力を立論の前提とした上で（民族紛争などで国民国家の枠組が動揺しつつある今日どこまで有効な議論だろうか）、著者は（白覚的）ナショナリズム」の必要性を説く。しかし、この「ナショナリズム」は国家との関連に限定されず、「地球ナショナリズム」「琉球ナショナリズム」などの言葉が（比喻としてではあるが）不用意に用いられ、議論を混乱させている。また、この種の言説の通例ではあるが、批判に鋭さを見せる著者も自身の主張になると突然ナイーブになる。頻出する「経済大国としての地位にふさわしい国際貢献」「国家の存続のためには個々の国民が自己を文字通り犠牲にしなければならぬ時がある」などの記述は、正直言って勘弁して欲しい。

本書の限界を典型的に示すのが、「ナウシカ」論である。「ナウシカ」の世界では、人々は強力な毒を持つ菌類植物の森「腐海」の脅威にさらされながら日々暮らしている。そこに、「巨神兵」なる超兵器を復活させて腐海を焼き払おうとする侵略者が登場し、腐海との共存を主張する主人公ナウシカと対立する。環境破壊反対の寓意が込められたこの設定を受

けて、著者は「環境保護とヒューマニズムは両立しない」という観点から、ナウシカを批判し、むしろ侵略者に軍配を上げる。腐海の植物は、人間が大地にまき散らした毒を吸収して清浄な水と砂とを作り出しているという設定も用意されているのだが、それでも「人間の利益よりも環境の保全を優先させた方が長期的には人間全体にとっての利益となる」と主張したところで、それが現在生きている個々の人間の利益を否定するものであることは変わらない」と言うのだ。

一見一理ある主張だが、重要な事実を見落としている井戸の水は、実は腐海によって浄化されたものである。腐海を焼き払えば「現在生きている個々の人間」の生存すら直ちに危うくなるだろう。結局、腐海との苛酷な共存こそが、唯一の現実的合理的な選択であることになる。「自然環境と人間の無条件の「調和」を説くのも愚かであるが、「対立」のみを強調する著者の「現実主義」も浅薄である。（それとも著者は、浄水器でも使うだろうか？まさに我々が現在そうしているように。）

確かに本書が指摘するように、「戦後民主主義」的言説はいくつもの矛盾を内在させ、時にはそれを隠蔽してきた。個人と共同体、人間と環境、民族独立と非暴力、「人間の権利を媒介に「環境」を守ろうとする「環境権」の概念的混乱などはその最たるものだろう。

15 ページのつぎ

しかしそれら諸矛盾は、日本社会自体が抱える二重三重の課題の率直な反映なのである。例えば空港やダム建設に反対して立ち上がったのは、しばしば、近代的構造を内部に残した「村」であつたし、公害と乱開発の防止に果たした「環境権」の役割を否定することはできない。矛盾を隠蔽したりその「止揚」を教条的に説くのではなく、かといって著者のように一方をあっさり切り捨てるのでもなく、それらと正面から向い合い、本来の意味で「現実的」な克服の道を求めていくこと、それこそが我々の課題なのではないか。